

日清戦争異聞

(原田重吉の夢)

萩原朔太郎

青空文庫

上

日清戦争にっしんが始まった。「支那も昔は聖賢の教ありつる国」で、
 孔孟こうもうの生れた中華であったが、今は暴逆無道の野蛮国であるか
 ら、よろしく膺ようちよう懲すべしという歌が流行はやった。月琴げつきんの師匠
 の家へ石が投げられた、明笛みんてきを吹く青年等は非国民として擲なぐ
 られた。改良劍舞の娘たちは、赤き襷たすきに鉢巻はちまきをして、「品川乗出
 す吾妻艦あずまかん」と唄うたった。そして「恨み重なるチャンチャン坊主ぼうず」
 が、至る所の絵草紙店えぞうしに漫画化されて描かれていた。そのチャン
 チャン坊主の支那兵たちは、木綿もめんの綿わた入いれの満洲服に、支那風の

木靴きぐつを履はき、赤い珊瑚玉さんごのついた帽子かぶを被り、辮髪べんぱつの豚尾ぶたを背中に長くたらしめていた。その辮髪は、支那人の背中の影で、いつも嘆息ためいき深く、閑雅に、憂鬱に沈思しながら、戦争の最中でさえも、阿片の夢のように逍遙さまよっていた。彼らの姿は、真に幻想的な詩題であつた。だが日本の兵士たちは、もつと勇敢で規律正しく、現実的な戦意に燃えていた。彼らは銃剣で敵を突き刺し、その辮髪をつかんで樹きに巻きつけ、高梁コーリヤン 畠ばたけの薄暮の空に、捕虜になつた支那人の幻想を野曝のさらしにした。殺される支那人たちは、笛のような悲声をあげて、いつも北風の中で泣き叫んでいた。チャンチャン坊主は、無限の哀傷の表象だつた。

陸軍工兵一等卒、原田重吉は出征した。暗鬱な北国地方の、貧

しい農家に生れて、教育もなく、奴隷のような環境に育った男は、軍隊において、彼の最大の名誉と自尊心とを培養された。軍律を厳守することでも、新兵を苛めることでも、田舎に帰つて威張ることでも、すべてにおいて、原田重吉は模範的軍人だった。それ故にまた重吉は、他の同輩の何人よりも、無智的な本能の敵愾^{てきが}心で、チャンチャン坊主を憎悪していた。軍が平壤^{へいじょう}を包囲した時、彼は決死隊勇士の一人に選出された。

「中隊長殿！ 誓つて責務を遂行します。」

と、漢語調の軍隊言葉で、如何にも日本軍人らしく、彼は勇ましい返事をした。そして先頭に進んで行き、敵の守備兵が固めている、玄武門に近づいて行つた。彼の受けた命令は、その玄武門

に火薬を装置し、爆発の点火をすることだった。だが彼の作業を終った時に、重吉の勇氣は百倍した。彼は大胆不敵になり、無謀にもただ一人、門を乗り越えて敵の大軍中に跳び降りた。

丁度その時、辮髪べんぱつの支那兵たちは、物悲しく憂鬱な姿をしながら、地面に趺坐ふざして閑雅な支那の賭博ばくちをしていた。しがなひようい日傭人とりの兵隊たちは、戦争よりも飢餓を恐れて、獣のように悲しんでいた。そして彼らの上官たちは、頭に羽毛のついた帽子を被り、陣営の中で阿片を吸っていた。永遠に、怠惰に、眠たげに北方の馬市場を夢の中で漂泊さまよいながら。

原田重吉が、ふいに夢の中へ跳び込んで来た。それで彼らのヴイジョンが破れ、悠々ゆうゆうたる無限の時間が、非東洋的な現実意識

で、俗悪にも不調和に破れてしまった。支那人は馳^かけ廻^かった。鉄砲や、青^{せい}竜^{りゆう}刀^{とう}や、朱の総^{ふさ}のついた長い槍^{やり}やが、重吉の周囲を取り囲んだ。

「やい。チャンチャン坊主奴^め！」

重吉は夢中で怒鳴った、そして門の門^かに双^{かんぬき}手^{もろて}をかけ、総身の力を入れて引きぬいた。門の扉^{とびら}は左右に開き、喚声をあげて突撃して来る味方の兵士が、その隙^{すきま}間から遠く見えた。彼は門を両手に握^めって、盲^{めくらめつぼう}目滅法に振り廻した。そいつが支那人の身^{からだ}体^たに当り、頭や腕をヘシ折るのだった。

「それ、あなた。すこし、乱暴あるネ。」

と叫びながら、可憫^{かわい}そうな支那兵が逃げ腰^{こし}になったところで、

味方の日本兵が洪水こうずいのように侵入して来た。

「支那ペケ、それ、逃げろ、逃げろ、よろしい。」

こうして平壤は占領され、原田重吉は金鷄きんしくんしょう勳章をもらったのである。

下

戦争がすんでから、重吉は故郷に帰った。だが軍隊生活の土産みやげとして、酒と女の味を知った彼は、田舎の味気ない土いじりに、もはや満足することが出来なかつた。次第に彼は放蕩ほうとうに身を持ちちくずし、とうとう壮士芝居の一座に這入はいった。田舎廻りの舞台

の上で、彼は玄武門の勇士を演じ、自分で原田重吉に扮装ふんそうした。
 見物の人々は、彼の下手へたカスの芸を見ないで、実物の原田重吉が、
 実物の自分に扮して芝居をし、日清戦争の幕に出るのを面白がつ
 た。だがその芝居は、重吉の経験した戦争ではなく、その頃にしき錦
 絵えに描いて売り出していた「原田重吉玄武門破りの図」をそつ
 くり演じた。その方がずっと派手で勇ましく、重吉を十倍も強い
 勇士に仕立てた。田舎小屋の舞台の上で重吉は縦横無尽あばに暴れ廻
 り、ただ一人で三十人もの支那兵を斬きり殺した。どこでも見物は
 熱狂し、割れるように喝かつさい采した。そして舞台の支那兵たちに、
 蜜柑みかんや南京豆ナンキンまめの皮を投げつけた。可憫あはれそうなチャンチャン坊主
 は、故意こどに道化おどけて見物の投げた豆を拾い、猿芝居のように食つ

たりした。それがまた可笑しく、一層チャンチャン坊主の憐れを
増し、見物人を悦ばせた。だが心ある人々は、重吉のために悲し
み、眉をひそめて嘆息した。金鷄勲章七級、玄武門の勇士とも
あろう者が、壮士役者に身をもち崩して、この有様は何事だろう。
次第に重吉は荒んで行つた。賭博をして、とうとう金鷄勲章を
取りあげられた。それから人力俵夫になり、馬丁になり、しま
いにルンペンにまで零落した。浅草公園の隅のベンチが、老いて
零落した彼にとつての、平和な楽しい休息所だった。或る麗ら
な天気の日、秋の高い青空を眺めながら、遠い昔の夢を思い出
した。その夢の記憶の中で、彼は支那人と賭博をしていた。支那
人はみんな兵隊だった。どれも辮髪を背中にたれ、赤い珊瑚玉の

ついた帽子を被り、長い煙管キセルを口にくわえて、悲しそうな顔をし
ながら、地上まゝに円まるくうづくまっていた。戦争の気配もないのに、
大砲の音が遠くで聴きこえ、城壁の周囲まわりに立てた支那の旗が、青や赤
の総ぶさをびらびらさせて、青竜刀の列と一所に、無限に沢山連なっ
ていた。どこからともなく、空の日影がさして来て、宇宙が恐ろ
しくひっそりしていた。

長い、長い時間の間、重吉は支那兵と賭博をしていた。黙って、
何も言わず、無言に地べたに坐りこんで……。それからまた、ず
っと長い時間がたった……。目が醒さめた時、重吉はまだベンチに
いた。そして朦朧もうろうとした頭脳あたまの中で、過去の記憶を探そうとし、
一生懸命に努めて見た。だが老いて既に耄碌もうろくし、その上酒アルコール

精^ル 中毒にかかった頭脳は、もはや記憶への把持^{はじ}を失い、やつれたルンペンの肩の上で、空^{むな}しく漂泊^{さまよ}うばかりであつた。遠い昔に、自分は日清戦争に行き、何かのちよつとした、ほんの詰らない手柄をした——と彼は思った。だがその手柄が何であつたか、戦場がどこであつたか、いくら考えても思い出せず、記憶がついそこまで来ながら、朦朧として消えてしまう。

「あア！」

と彼は力なく欠伸^{あくび}をした。そして悲しく、投げ出すように^{つぶや}呟いた。

「そんな昔のことなんか、どうだって好いや！」

それからまた眠りに落ち、公園のベンチの上でそのまま永久に

死んでしまった。丁度昔、彼が玄武門で戦争したり、夢の中で賭博をしたりした、憐れな、見すばらしい日傭人ひようとりの支那傭兵と同じように、そっくりの様子をして。

青空文庫情報

底本：「猫町 他十七篇」岩波文庫、岩波書店

1995（平成7）年5月16日第1刷発行

底本の親本：「萩原朔太郎全集 第五卷」筑摩書房

1976（昭和51）年1月25日

初出：「生理 終刊第五号」

1935（昭和10）年2月発行

入力：大野晋

校正：鈴木厚司

2001年10月11日公開

2016年1月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日清戦争異聞

(原田重吉の夢)

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 萩原朔太郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>